

ラトビア大学における日本語母語話者講師と非母語話者講師の 試験作成の際の考え方の違い

ラトビア大学
大橋 幸博

1. はじめに

(文化庁, 2016; 国際交流基金, 2017) の調査によると、2015 年度の世界の日本語学習者数は 3,846,777 人であり、その 5% (191,753 人) が日本国内で、残りの 95% (3,655,024 人) が日本国外である。そして、その日本国外の日本語学習者に日本語を教えている教師の 78% (49,807 人) が非母語話者教師で、残りの 22% (14,301 人) が母語話者教師である。さらにその調査によると、2012 年から 2015 年にかけて、日本国外では、母語話者教師の数は 14,819 人から 14,301 人に減少し、非母語話者教師の数は 48,986 人から 49,807 人に増加している。つまり、日本国外の日本語教育において、非母語話者教師が担う役割は大きいといえる。また、2017 年度の国際交流基金の調査では (国際交流基金 online: latvia.html)、ラトビアの日本語母語話者教師は 2 名で、非母語話者教師は 6 名であり、ラトビアでも、非母語話者教師が担う役割は大きい。

ラトビア大学では、日本人講師 (筆者) 1 名とラトビア人講師 1 名の計 2 名で大学生と大学院生に日本語を教えている。ラトビア人講師は、大学 1 年生の文字・漢字・文法・読解を担当し、それ以外を筆者が担当している。2018 年の春学期、ラトビア人講師が作成した期末試験 (漢字・文法) を筆者が代わりに行うことになり、その際、内容に関して、妥当性・信頼性・真正性などの観点から気になる点があったので、今回、そのラトビア人講師に 1 時間半のインタビュー調査を行った。

2. ラトビア大学・ラトビア人講師

ラトビア大学はラトビアで日本語が学べる唯一の高等教育機関である。2018 年 9 月現在、ラトビア大学人文科学部アジア学科日本語コースでは、大学生 (1 年生～3 年生) と大学院生 (1 年生～2 年生) 合わせて、約 70 名が日本語と、アジアの歴史・文学・宗教を学んでいる。日本語に関しては、筆者とラトビア人講師の 2 名で教え、ラトビア人講師は、大学 1 年生の文字・漢字・文法・読解を担当し、筆者は大学 1 年生の会話と、あとの学部生と院生を担当している。学年別の日本語の授業の時間数は、大学 1 年生 (220 時間)・大学 2 年生 (200 時間)・大学 3 年生 (150 時間)・大学院 1 年生 (50 時間)・大学院 2 年生 (50 時間) である。使用している教科書は、大学 1 年生が「げんき I と II」、2 年生が「げんき II・中級へ行こう・ストーリーで覚える漢字 II 301～500」、3 年生が「上級へのとびら・ストーリーで覚える漢字 II 301～500」であり、大学院生には様々な教科書を使用している。

次に、上記で述べたラトビア人講師について少し説明したい。そのラトビア人講師はラトビア大学で日本語を学び卒業し、修士課程を経て、現在は博士課程に在籍している。そして、ラトビア大学で、4 年間ほど日本語を教えている。また、論文のテーマは助詞の「の」ということもあり、非常に文法に興味がある講師である。留学経験はないが、日本に旅行したことはあり、日本語能力は現在の日本語能力試験の N2～N3 の間ぐらいである。

3. インタビュー調査の概要

2018年の春学期の期末試験で、ラトビア人講師が行う予定であった大学1年生の漢字と文法の試験（ラトビア人講師が作成したもの）を筆者が代わりに行うことになり、その際、内容に関して、妥当性・信頼性・真正性などの観点から気になる点があったので、期末試験の翌週に、ラトビア人講師に1時間半のインタビュー調査を行った。インタビュー調査では、大学1年生の春学期の漢字と文法の期末試験と、事前に見せてもらった大学1年生の2017年の秋学期の漢字と文法の期末試験の両方の内容に関して質問をした。大学1年生の秋学期の試験範囲は、げんきⅠの1課から9課までで、漢字は9課までの101字であり、春学期はげんきⅠの10課からげんきⅡの17課までで、漢字は17課までの224字である。

ここで、妥当性・信頼性・真正性の定義について明らかにしておく。（関他, 2013）は、妥当性・信頼性・真正性が高いテストは良いテストであると述べ、それらを次のように説明している。まず、妥当性というのは、本来測ろうとしているものが測れているか、また、授業で扱われた内容から逸脱せずに、代表的な項目が取り上げられているかということ。例えば、下記の（1）は英語を日本語に訳させる問題であるが、妥当性が低い問題である。なぜなら、（1）は「～がほしい」という文型を理解しているか確認するための問題であるが、間違いやすい助数詞（ひき・びき・びき）も関わってくるので、測りたいものが測れず、妥当性が低いといえる。

(1) ()

I want 4 dogs.

次に信頼性であるが、信頼性とはテストの結果が信頼できる安定した結果で、偶然などにより変動しないものであるという保証である。信頼性を高めるためには、問題数を多くすること、思い違いないように問題文の指示を明確にすること、解答例を添えることが挙げられる。最後に、真正性とは、テストに使われている素材や場面などが現実の言語使用状況をどれだけ反映しているかということである。例えば、下記の（2）は「しか」を使い、日本語に訳させる問題であるが、真正性が低い問題である。なぜなら、人によっては言えなくもないが、多くの人は「昨日、9時間しか寝なかった。」とはあまり言わないので、真正性が低いといえる。

(2) ()

I slept 9 hours yesterday. [*You have to use しか.]

以上、妥当性・信頼性・真正性の定義を明らかにし、また、どのような問題が妥当性・信頼性・真正性が低いのかを示した。では、次の章で、漢字と文法の期末試験を妥当性・信頼性・真正性などの観点から、分析する。

4. 気になった期末試験の問題

この章では、ラトビア人講師が作成した大学1年生の秋学期・春学期の期末試験の中で、特に気になった問題をみていく。実際の問題の指示文は、秋学期ではラトビア語で書かれて、春学期では、留学生が入ってきたこともあり英語で書かれている。本稿では、ラトビア語の指示文は日本語に翻訳したものを記載する。

4.1. 漢字の試験

漢字の試験では、秋学期・春学期の両方で筆順を問う問題があった。(3)は秋学期の問題で、(4)は春学期の問題である。試験は100点満点で、配点に関しては(3)は(4点×3問=12点)で、(4)は(3点×4問=12点)で、全体の1割程度である。

漢字の筆順を見せてください(ラトビア語で記載) Please show me the stroke orders of Kanji.

(3) 北
家
母

(4) 教
写
安
朝

この問題に関して、ラトビア人講師に、なぜ筆順を問う問題を出したのかと尋ねると、部首を意識してもらうため、そして、正しい筆順で書くと部首が習得しやすいと思う、という答えが返ってきた。また、筆順を問う問題は学生にとって難しくないかと質問すると、ラトビア人講師は授業中に期末試験に出すと言っているため、大丈夫だと答えた。質問した後、実際の試験結果は、どうだったのだろうかと思い、見せてもらった。下記に(3)と(4)の試験結果を示す。

(3) 26名中：12点が10名、8点が5名、4点が6名、0点が5名

(4) 25名中：12点が7名、9点が5名、6点が5名、3点が4名、0点が4名

試験結果を見ると、正しい筆順で書けた学生は比較的多かったといえる。部首を習得したかどうかに関しては、秋学期・春学期と、部首を問う問題はなかったため、疑問が残る。しかし、テストの波及効果として、試験で筆順を問う問題があることで、学生は日頃から筆順を意識し、きれいに書くように心がけるので、1年生の期末試験に筆順を問う問題が1割程度あることに関しては、筆者は良いことであると考えます。

他にも、気になる漢字の問題があった。(5)は春学期の問題で、日本語や英語の言葉の漢字を()に書かせるものだが、筆者は妥当性が低い問題であると考えます。

Please write suitable Kanji in the gaps.

(5) えいご () あかちゃん ()
Tonight () to wake someone up ()

その理由は、まず、Tonight という問題だが、ラトビア人講師に、この問題の正しい答えは何かと尋ねると、「今晚」と答えた。しかし、「晚」という漢字は未習なので、学生はおそらく「今夜」か「今ばん」を書くであろう。それに、「今」という漢字は5課で出てくるので、春学期の試験範囲(10課~17課)から外れ、本来測りたい漢字ではない。つまり、「今ばん」と答えても、正解となり、妥当性が低い。次に、to wake someone up という問題だが、この問題も妥当性が低い問題である。なぜなら、答えは「起こす」だが、たとえ学生が「起」という漢字を知っていたとしても、「起こす」という言葉を知らなければ、この問題に正しく答えることができないからである。(5)の問題に関して、なぜこのような問題を出したのかと尋ねると、ラトビア人講師は、ラトビア大学で日本語

を勉強していた1年生の時に受けた試験が、こんな感じだったと説明した。

4.2. 文法の試験

文法の試験でも、秋学期・春学期の期末試験の中で、気になった問題があった。本稿では、それらの問題(6)～(12)をみていく。(6)は英語から日本語に翻訳させる問題である。ラトビア人講師に尋ねると、「私もくつがほしいです。」が正しい答えであると答えた。しかし、この問題には文脈がないので、「私はくつもほしいです。」とも言える。この問題で確認したいのは、「～ほしい」という文型を使い文が作れるかどうかであり、助詞の「も」ではないので、妥当性が低い問題であるといえる。また、実際、この問題の試験結果を見せてもらおうと、25名中、17名が「私もくつがほしいです。」と答え正解になっており、5名が「私はくつもほしいです。」と答え不正解になっていた。

Translate the sentence into Japanese.

(6) ()

I want shoes too.

(7)は助詞「も」の意味を理解しているか確かめる問題である。この問題で、ラトビア人講師が求めている答えは「月曜日にも大学へ行きました。」であるが、学生達が通うラトビア大学はもちろん、通常、ラトビアにある大学は日曜日は閉まっていることから、(7)の「日曜日に大学へ行きました。」という状況は起こりえないので、真正性が低い問題であるといえる。

助詞「も」を使い、2つめの文を書きかえなさい。(ラトビア語で記載)

(7) 日曜日に大学へ行きました。月曜日に大学へ行きました。

(8)は既習の助詞の意味を理解しているか確認する問題である。ラトビア人講師に答えを尋ねると、1は(は)(×)(×)で、2は(を)(×)(に)であると答えた。しかし、筆者は、1は(×)(は)(×)、2は(を)(から)(と)や、(から)(×)(と)などの答えも可能なので、(8)は妥当性が低い問題であると考ええる。

()に助詞を書きなさい。助詞が必要でないところには×を書きなさい。(ラトビア語で記載)

(8) 1. 山川さん()あさ()何も()飲みません。

2. デパート()出て()、友だち()会いました。

(9)は「てから」と「前に」という文型を理解しているか確かめる問題である。ラトビア人講師に答えを尋ねると、答えは(手紙を書い)てから(彼と別れました。)と、(彼と別れる)前に(手紙を書きました。)であると答えた。筆者は(9)は妥当性が低い問題であると考ええる。なぜなら、「てから」と「前に」の文型を理解していても、既習ではあるが、**break up**「別れる」という少し難しい語彙を覚えていなければ、解けない問題であるからである。また、(9)は信頼性が低い問題でもある。実は、試験を受けた25名中5名が(彼と別れ)てから(手紙を書きました。)、(彼と別れる)前に(手紙を書きました。)という答えを書いていた。筆者は、その5名に、(9)は難しか

らすると、(12) は少し不自然な文であり、また何を確認するための問題であるか明確でないので、真正性・妥当性の両方が低い問題であるといえる。

Translate the sentence into Japanese, using そうです・てくれる・かもしれない・たら・いいんです.

(12) ()

I heard that my mother will may clean my room if I graduate. I hope I can graduate. I hope you can graduate too.

5. ラトビア人講師がインタビュー調査で何を感じたか

インタビュー調査の最後に、ラトビア人講師に試験内容についての話し合いの中で、何を感じたか、教えてもらった。すると、まず、普段は自信がないから日本人講師に日本語や試験に関して自分からは話せないが、今回、試験のことを色々話せて良かったと言ってくれた。次に、自身が作成した問題が、測りたいものが測れていないこと、少し不自然な文であること、指示文が明確でないことなど、本人はそんな問題があるとは思ってもいなかった。最後に、今回教えてもらった、妥当性・信頼性・真正性という観点は、次に試験を作成する際に役に立ちそうであると答えてくれた。

6. まとめ

今回のインタビュー調査から様々なことが分かった。まず、試験作成に関しては、非母語話者教師だからこそ、気づけることがあるということ。これは、母語話者教師が試験を作成している職場では気がつきにくいことである。次に、通常、非母語話者教師から母語話者教師に、日本語のことについて質問しにくいのが、母語話者教師が上手に話す場を設けることで、解決できるということが分かった。また、ラトビア人講師に、どのような試験が難しいのか、また良い試験なのかも理解してもらえた。今後の課題としては、ラトビアの日本語教育発展のためにも、非母語話者教師の育成が必要であると考えられる。

参考文献・資料

国際交流基金 (2017) 『海外の日本語教育の現状 2015 年度日本語教育機関調査より』 国際交流基金
国際交流基金 「日本語教育国別情報 ラトビア 2017 年度版」

<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2017/latvia.html> (2018.8.16)

関正昭・平高史也編、村上京子・加納千恵子・衣川隆生・小林典子・酒井たか子著 (2013) 『テストを作る』 スリーエーネットワーク

文化庁 (2016) 「平成 27 年度国内の日本語教育の概要」

http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongokyoiku_jittai/h27/pdf/h27_zenbun.pdf
(2018.8.16)